

# 古本説話集の動詞

## —語彙論的考察—

山 内 洋 一 郎

目次	一、はじめに	六、使用度数
	二、語の認定	七、主要語彙
	三、語数	八、分類語彙表
	四、活用形	付、補助動詞
	五、活用の行	

### 一、はじめに

国語史研究が音韻・語法の面で進歩を見せているのに対し、語彙の面では成果に未だ乏しいように思われる。語彙索引の公刊が相次いだのも近年であって、今後一層開拓される研究分野であろう。

広島大学国語学研究室が院政期の説話集である古本説話集の総索引を油印刊行したのは昭和33年であったが、筆者は、当時それに携わっていた関係もあって、「古本説話集の語彙」として、調査結果の概要を発表したことがあった（国語学会中国四国支部会、昭34・11）。以後古本説話集研究についての学界の進歩に伴ない、数多くの訂補を必要とするに至ったため、古本説話集全体を対象とする語彙論的考察は猶時日を要することとなった。そこで、ここでは動詞のみを取り上げて考えてみようとする。

動詞を対象とするのは、(1)、名詞よりも語彙構成の体系が明確であり、分析も比較的容易であると思われること、(2)、名詞に次いで語彙量が多く、計量的分析に堪えうと思われること、などの理由による。

古本説話集は資料性から見れば、次のような組織になっている。

卷上 卷下	それぞれ	目次	変体漢文。
		本文	ひらがな文 漢字少々混じる。
		和歌	卷上84首、卷下1首。(短連歌二組を含む)

目次は漢字のみで表記され、その訓読法は明らかでない。「問む」「歴覧」など注意すべき語を含み、本文とは違った語彙相を示しているが、本稿では資料の均質性を必要とするから、除外して扱うのが妥当であろう。卷下に一丁の欠がある。川口久雄氏が信貴山縁起により文章を補なわれたのは妥当な処置と認められ、本稿でもそれに従う。

本文は漢字を少々まじえたひらがな文で、中に和歌を含む。和歌は散文に比して体言の占める率が高く、異なる語彙相を持っている。従って、散文と和歌を混じたまの語彙調査は統一を欠くかとも見られよう。しかし、巻上(84首を含む)は和歌説話集とも言うべきもので、和歌は説話の中心部分なのである。不可分不可欠のものである。もちろん和歌のみの語彙相、散文の語彙相を別個に考察することも必要ではあるが、単一体として考察することに意味があると考えるのである。本稿では和歌を考慮した処理・分析に及ぶゆとりがなかった。

巻上と巻下は以上述べたところでも明らかなように資料性が異なる。巻上は和歌を含む和歌説話集であり、主に王朝に題材を仰ぎ、出典のあることが多い。和歌の多い関係から名詞の占める率が高く、王朝的な用語が多い。巻下は仏教説話集であって、世俗的である。動詞の占める率が高く、語彙相も異なる。異なり語数による品詞比率は、以前の試算では、巻上は名詞51.4%動詞31.1%、巻下は名詞46.8%動詞36.4%であった。(この数値はなお訂正を要する。)大野晋博士の研究<sup>④</sup>に照合してみると、巻上は日記グループに入り、巻下は竹取物語に近い。全体として両者の中間に入るという結果をえた。こうした点から巻上・巻下を異なる二作品と見るべきかとも思われるが、やはり両者を合した統一体としての古本説話集を考えるべきであろう。語彙相の異なる部分のあることは、説話集の必然であって、それに対する配慮を怠ることさえなければ、全体を対象として論じて良いと思うのである。

注 「基本語彙に関する二三の研究」国語学24集、昭31.

## 二、語 の 認 定

考察の出発点は語の認定である。動詞が他品詞とまぎれることは割に少ない。指定・敬譲の意で辞的にはたらく語を補助動詞とし、動詞より除いた。詳しくは付篇参照。「さり」系の語を連体詞・接続詞などとし、「かかる」「ありつる」などを連体詞とするなど、或いは他者の方法とは異なるかもしれない。複合動詞を認める。凡ね常識的な基準により決定した。こうして認定した動詞全てを本稿の第八章に語彙表として示しておく。

活用型については、「おはす」が問題である。「し・す・する・すれ・せ」とあって、命令形のみサ変と異なるようであるが、「おはす也」の四段風の例もあって、特殊活用と言うべきである。本稿ではサ変に収める。「生く」「呑ぶ」は連用形のみで、厳密には活用形不明であるが、上二段に収める。

活用形の認定には、助動詞「り」を已然形接続とし、「とぞいひつたへる」の「る」は下二段の連用形に助動詞「り」の接した例と見るなど、二、三処理の特殊なものがある。助詞「ばかり」を「ぐらい」の意の時に終止形接続とする。

## 三、語 数

まず異なり語数・延べ語数の表を示そう。

1,005種の動詞が4,788回出現している。この異なりは徒然草より少ないが、紫式部日記より多

第一表

動詞語数表

活用型	異なり語数			延べ語数				使用度数 B
	上	下	全巻 A	上	下	全巻 B	百分比%	平均 A
四 段	307	448	615	998	1,815	2,813	58.7	4.6
上 一段	11	19	25	83	157	240	5.0	9.6
上 二段	13	20	25	25	45	70	1.5	2.8
下 二段	153	181	261	341	554	895	18.7	4.5
カ 変	4	12	13	20	86	106	2.2	8.1
サ 変	25	44	57	103	254	357	7.5	6.3
ナ 変	3	2	3	5	34	39	0.8	13
ラ 変	3	5	6	81	187	268	5.6	44.7
計	519	731	1,005	1,656	3,132	4,788	100	4.8

い。また、四段活用が過半を占めることが瞭然となった。このこと自体は常識でもあったが、数値を出してみても、二位の下二段の18.7%に比して四段の優勢が実感される。上二段の意外な劣勢も目につく。

活用型の優劣については、複合動詞の上位構成語や他品詞に転成した語なども併わせて考慮されねばならない。動詞には上位構成語として頻用されて、終には接頭辞となるものもあれば、逆に下位にのみ用いられる語もあり、これらは活用型の優劣の判断にも影響を及ぼすであろうが、今これに及びえない。

#### 四、活 用 形

次に語彙と活用形との関係を考えてみよう。

第二表

活用形比率表

	延 べ 語 数						比 率 %					
	未	用	止	体	己	命	未	用	止	体	己	命
四 段	426	1,600	189	418	153	27	15.1	56.9	6.7	14.9	5.4	1.0
上 一段	21	148	3	32	32	4	8.7	61.7	1.3	13.3	13.3	1.7
上 二段	5	49	5	10	1	0	7.1	70.0	7.1	14.3	1.4	0
下 二段	173	563	49	73	22	15	19.3	62.9	5.5	8.2	2.5	1.7
カ 変	9	72	10	8	4	8	8.5	67.9	9.4	7.5	3.8	2.8
サ 変	88	180	29	37	15	8	24.6	50.4	8.1	10.4	4.2	2.2
ナ 変	9	10	12	5	3	0	23.1	25.7	30.8	12.8	7.7	0
ラ 変	31	90	33	98	13	3	11.6	33.6	12.3	36.6	4.8	1.1
計	762	2,712	330	681	243	60	15.9	56.6	6.9	14.2	5.1	1.3

まず動詞全体の活用形比率を見ると、連用形が56.6%となって、他の五活用形の総計よりも多いことが注意せられる。しかも複合動詞などの語構成に用いられる連用形が多量に存することを

思えば、連用形をもって動詞の基本形と考えることの妥当性が肯定されよう。次いで未然形・連体形が多い。未然形はその機能が凡ね未然という名に包含されるもので、単一体と見なされうるが、連体形は連体法・準体法の他に、係結び終止や助動詞「べし」などのラ変に続く場合も含んでいる。この点、鈴木胤の考えのように、「べし」など一群の助詞助動詞（ラ変にはその連体形につく性質を有するもの）が接続する活用形を別に設けるのが良いように思われる。そうすれば、ラ変の連体形が他活用比して極端に比率の高いことも目立たなくなるであろう。そして、終止形は殆ど終止法の数値となって、動詞の基本形と目されている終止形がいかにも出現率の低いものかも実感されるであろう。そういった分析は今後の作業である。

活用形の比率が活用によってかなりの違いを見せていることも注意せられる。語数の多い四段・下二段は類似の比率を示しているが、他活用はかなり个性的である。ラ変の連体形については述べたところ。ナ変の終止形の比率が高いのは、それ自体に完了の意味を含んでいて、説話の地の文でそれのみで終止することが多いためであり、上一段で終止形が極端に少なく、已然形の率が高いのは、その主要語彙である「見る」が、終止形1、已然形30という使用率を示していることに影響されたものである。未然形のみ用いられる「敢ふ」など、特定の活用形のみ用いられるいは頻用される語もあって、このような活用、あるいは主要語彙の様相も興味ある課題の一つと言えよう。

## 五. 活 用 の 行

第三表 活用行による異なり語数表

活用行	四 段	上 一 段	上 二 段	下 二 段	変 格	計
ア		( 1 )		3 ( 1 )		3 ( 2 )
カ	116 (51)	1 ( 1 )	3 ( 3 )	38 (16)	13 ( 1 )	171 (72)
ガ	17 (10)		1 ( 1 )	13 ( 5 )		31 (16)
サ	89 (47)			26 (19)	57 ( 2 )	172 (68)
ザ				1 ( 1 )		1 ( 1 )
タ	17 (11)		5 ( 3 )	29 ( 7 )		51 (21)
ダ			( 1 )	20 ( 5 )		20 ( 6 )
ナ		2 ( 2 )		3 ( 3 )	3 ( 2 )	8 ( 7 )
ハ	107 (64)	1 ( 1 )	2 ( 2 )	26 (23)		136 (90)
バ	9 (10)		6 ( 2 )	6 ( 5 )		21 (17)
マ	63 (54)	4 ( 1 )	3 ( 3 )	30 (23)		100 (81)
ヤ			3 ( 3 )	12 (10)		15 (13)
ラ	197 (98)		2 ( 2 )	48 (31)	6 ( 3 )	253 (134)
ワ		17 ( 2 )		6 ( 2 )		23 ( 4 )
計	615 (345)	25 ( 7 )	25 (20)	261 (151)	79 ( 8 )	1,005 (532)

括弧内の数値は、その行に属する一次語の異なり語数である。例えば、タ行上二段活用には「落つ」「躍り落つ」「朽つ」「飽き満つ」「成り満つ」の5語がある。一次の語で見ると、「落つ」「躍り落つ」から「落つ」, 「飽き満つ」「成り満つ」から「満つ」, これに「朽つ」を加えて、

この三語がタ行上二段活用として古本説話集に存していると見るのである。「満つ」の如く複合語中にしか存しないもの、「動き」の如く居体言の形のもの、「あはれがる」「きらめく」「大人ぶ」の如き動詞をつくる接尾辞をもこの一次語に含めているから、一次語の認定のしかたによっては、数値に変動があろう。第八章の分類語彙表は活用形・活用の行により動詞を分類し、さらに、ここに言う一次語の順序に配列し、一次語と認めたものをゴジックで示してある。具体例はそこを参照されたい。

## 六、使用度数

次に各動詞の出現回数（使用度数）に注目しよう。例えば「言ふ」は270回現われているが、このように度数の多い語にはどのようなものがあるか。「言ひ契る」のように一回きりの語はいくつあるであろうか。そこで使用度数と活用形・異なり語数との関係を示す次表を作成した。

第四表 使用度数分布表

活用形 \ 度数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 ~15	16 ~20	21 ~30	31 ~50	50~	計
四 段	360	94	41	24	16	14	6	6	4	2	13	13	6	8	8	615
上一段	18	1	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	25
上二段	14	4	0	3	1	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	25
下二段	144	33	24	17	10	6	2	5	3	3	5	0	4	4	1	261
カ 変	7	1	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	13
サ 変	32	16	1	3	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	1	75
ナ 変	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	3
ラ 変	2	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	9
計	578	150	70	47	28	22	8	13	7	6	20	17	13	13	13	1,005

我々は1,005語のうち、一度しか現われない語が578語、全1,005語の57.6%もあることがわかった。度数1と2の語を合わせてみれば、728語で72.5%を占め、同様に累計して度数4までの語が846語、84.3%を占めることも計算できる。異なり語数に関しては、使用度数の少ない語が8割強になって、使用度数の多い語はごく少数であると言えよう。このことは自明のことではあるが、古本説話集程度の資料では、5回出現する語は（実際は5回では目立った存在ではないにも拘らず）既に重要な単語の類に入ることに注目したい。

ここから基礎語彙認定の問題が始まる。基礎語彙は出現回数の多いものから認められるであろうが、どのあたりを下限とするかについては考慮が必要であろう。この点不勉強にして先学の論を調査せぬまま、思いつきを述べてみたい。

## 七、主要語彙

上表のサ変の欄を見ると、度数1が32、度数2が16、3が1、4が3とある。これら一グルー

プに対し、度数10以上の5語を一グループと見ることが許されよう。間に断絶があるのである。この5語<す(他動)・おはす・す(自動)・具す(自動)・御覧ず>はサ変の基礎語彙と呼んでさしつかえないであろう。同様に上二段・上二段・変格活用を見ることができる。語数の多い四段では断絶のないかわりに、語数の減少率が注意せられる。360からその26%の94に、さらに半数の41に、というふうに減少した勢いがゆるくなるのが4と5の間である。数値が少なくなると偶然による上り下りがあるので問題であるが、或いは6と7の間に切れ目を見出しうるかもしれない。同様に下二段、全動詞の場合も考えてみる。

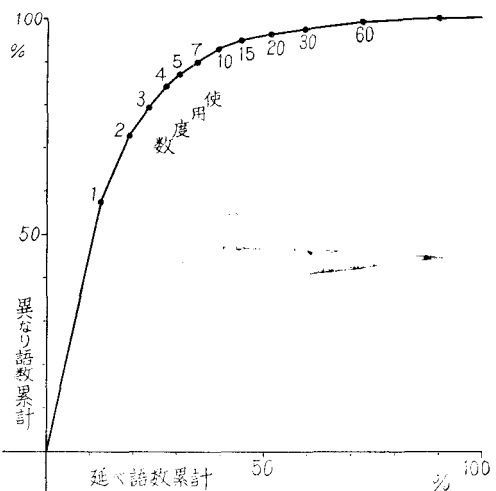
以上述べたところで大体の線は出たようである。しかし、度数5以上とするか、6 或いは7以上とするかは、研究者まかせではないか、という疑念があろう。そこで、古本説話集の動詞全体における基礎語彙として、各活用形は考慮外にして、次のようなことを考えてみた。使用度数1の語は異なり語数の上では57.6%も占めるが、延べ語数においては578語、全4,639語の12.5%を占めるにすぎない。度数31以上は26語、2.5%にすぎないが、逆にその延べ語数は1,940もあって41.8%にも達している。延べ語数を基礎語彙を選ぶ観点に入れたらどうなるだろうか。

第五表 異なり語数、延べ語数相関表

使用度数	1	2	3	4	5	7	10	15	20	30	60	全
異なり累計	578	728	798	846	875	904	929	949	966	979	996	1,005
同 %	57.6	72.5	79.5	84.3	87.0	90.0	92.5	94.5	96.2	97.5	99.2	100
延べ語数累計	578	878	1,088	1,280	1,415	1,610	1,829	2,076	2,386	2,698	3,366	4,788
同 %	12.1	18.4	22.7	26.7	29.6	33.6	38.2	43.4	49.8	56.3	70.3	100

延べ語数累計比50%は、使用度数19の語以下を累計して始めて得られる。逆に言えば、使用度数の多い順に僅か41語選んだだけで全語彙の半数に達するのである。この41語は極めて重要と言えよう。だが、使用延べ語数50%という数字もまた恣意的選択と言えよう。1,005語中の41語では少なすぎるとも言えよう。恣意的でないためには、この相関の中で動かぬ一点を見出せばよい。使用度数の少ない語では、異なり語数こそ大きい比率を示すけれども、延べ語数の比率は少ない。使用度数の大きい語ではこの逆である。とすれば両端から歩み寄って両者の均衡のとれた個所があるはずである。

左のグラフはこの累計比の相関を図示したものである。この曲線が縦軸寄りから横軸寄



りになる点、すなわち或る使用度数の数語を加えることによって、累なり語数の増加率よりも延べ語数の増加率が高くなる点、これは分布におけるくぎりめとして意味ある個所ではないだろうか。

古本説話集の動詞では使用度数4と5の間がこれに当る。この点から全動詞を二分し、その数値を整理すれば次のようになる。

	使用度数	異なり語数	同比率	延べ語数	同比率
A 層	1～4	846	84.3%	1,281	27.6%
B 層	5以上	159	15.7%	3,358	72.4%

このB層を私見による主要語彙——仮称、限定した使い方なので術語として固定している「基礎語彙」を憚って——の層と見ようと思う。

この主要語彙の考え方については問題があるであろう。分野のとり方によってはAB二層には分かれたいのではないか。語彙量の少ないものでも有効か。実数計算でなくて推定する方法があるかどうか。これらは今後の課題としたい。ただ、古本説話集の場合、名詞・形容詞などはこの方式でよいように思われた。勿論、品詞別分野でなく、古本説話集全体を対象とする場合は有効であろうと思う。

次に主要語彙の一覧と分析を試みることにする。使用度数の多い順に30位までは、他資料と比較して、異同を見ようと思う。

源氏物語 寿岳章子「源氏物語基礎語彙の構成」, 計量国語学41, 昭42.7

総合雑誌 国立国語研究所「総合雑誌の用語」前編, 昭32.4

古本説話集の使用率は語彙量を12,960として計算した。

第六表 主要語彙表 (1)

順位	古本説話集				源氏物語		総合雑誌		
	語	実数	使用率%	語	使用率	語	使用率		
1	言 ぶ	270	20.8	あ り	22.520	ス ル	38.466		
2	有 り	250	19.2	す	14.045	居 ル	20.450		
3	す <他>	220	16.9	思 ぶ	12.690	イ ウ	18.463		
4	思 ぶ	160	12.3	見 る	9.545	為 ・ 成 ル	10.591		
5	見 る	150	11.5	お ぼ す	9.165	有 ・ 在 ル	7.898		
6	成 る	116	8.9	き こ ゆ	8.180	来 ル	4.370		
7	参 る	100	7.7	い ぶ	6.150	サ レ ル	3.923		
8	申 す	87	6.7	は べ り	6.020	ミ ル	3.786		
9	候 ぶ	72	5.5	の た ま ぶ	5.415	オ モ ウ	3.639		
10	よ む	60	4.6	な る	4.930	ユ 行 ク	3.338		
11	見 ゆ	54	4.1	見 ゆ	4.430	デ キ ル	2.934		

12	知	る	52	4	お	ぼ	ゆ	3.750	依	・	抛	ル	2.580	
13	来		52	4	ま	る	る	3.540	持		ツ		2.177	
14	食	ふ	41	3.1	お	は	す	3.395	カ	ン	ガ	エ	ル	2.082
15	取	ら	37	2.8	知		る	3.190	ヤ			ル	1.885	
16	造	る	37	2.8	聞		く	2.860	対		ス	ル	1.838	
17	取	る	37	2.8	附	・	着	く	2.845	ト		ル	1.669	
18	居	る	36	2.8	も	の	す	2.585	デ		ル		1.643	
19	思	ゆ	35	2.6	お	は	しま	す	2.195	得		ル	1.523	
20	の	ぼ	34	2.5	出		づ	1.865	シ		ル		1.316	
21	お	は	36	2.5	渡		る	1.830	シ	マ	ウ		1.256	
22	聞	く	32	2.5	さ	ぶ	ら	1.820	居		ル		1.189	
23	返	る	32	2.5	も	て	な	1.555	ワ	カ	ル		1.085	
24	失	す	32	2.5	す	ぐ	す	1.445	ダ		ス		0.970	
25	入	る	31	2.4	ま	さ	る	1.270	聞	・	訊	ク	0.947	
26	出	づ	31	2.3	書		く	1.220	ツ	ク	ル		0.942	
27	仰	せ	30	2.2	思	ひ	出	1.150	サ	セ	ル		0.939	
28	問	ふ	29	2.2	入		る	1.140	ク	レ	ル		0.929	
29	行	く	28	2.2	す		ぐ	1.100	オ	コ	ナ	ウ	0.897	
30	出	で	27	1.7	ふ		(経)	1.055	書		ク		0.868	

比較には基本である語の認定のしかたが統一せられていることが望ましいが、この三資料はそれぞれ異なっている。総合雑誌で「スル」が群を抜いて多いのは、現代に漢語サ変が愛用され、それを全て二語に分割しているからであろう。古本説話集では複合サ変を認め、「す」自体も自動詞・他動詞を別個にしている。「す」を自他に峻別できるかどうかには問題がある。）サ変全ては357語、使用率27.76%となるが、それでも総合雑誌には遥かに及ばない。もっとも認定方法が違うのであるから、サ変の数値を手直ししただけでは厳密な比較にはならない、傾向がうかがわれるにすぎない。

源氏物語は吉沢博士の新釈に基づいて修正された値のようである。従って敬讓の助動詞「奉る」「申す」などは除いてあるが、指定の「あり」は含んでいるらしい。古本説話集で除いてある指定の「あり」60を加えると310語、使用率24.16%、順位1位となり、源氏物語に同じくなる。

古本説話集で「言ふ」が高率を示すことには二つの理由が考えられる。古本説話集で「申す」「仰せらる」「のたまふ」など敬讓表現の総計よりも遥かに「言ふ」が多いのに対し、源氏では「きこゆ」「のたまふ」など敬讓表現が逆に多い。敬讓表現を多用する源氏物語、常体の語で叙述する古本説話集、という違いがここに示されている。もう一つは、敬讓表現を含む言わば「言ふ」グループの使用率を両資料で集計してみるに、古本説話集が五割ほど源氏物語より高い。これは「言ふ」グループが会話引用の地の文に主に用いられると見るならば、会話の長く、従って言語



量のわりに引用形式が少ない源氏物語、会話が短かくて話者の転換の早い説話集、という違いをも示しているようである。

古本説話集と源氏物語を対比してみると、重要な単語ほど近似の位置を占めている。しかし、過半の語が一方の資料のみに見える。そのうち、源氏物語に敬讓体が多いという点の上に乗って、語の対応関係を見ることができよう。例えば、

(古本) 申す——(源氏) きこゆ 候ふ——はべり いふ、仰せらる——のたまふ  
来、居る——おはす

これらは時代差をも含めての資料の違いと言うべきであろう。この「申す」「候ふ」や常体の「言ふ」「来」などの多用は、平安朝語彙との比較からは、相当の特色となろう。

常体の語の多用と「取らす」「取る」「食ふ」などの多いことには文体上の関連がある、と共に資料の素材にかかわることがらでもある。「よむ」が多いのは古本説話集の前半が歌物語とも言うべき内容であるためである。上掲の30位以内では、言語量の少ない資料でありながら、素材に関係する語が殆どないことにむしろ注意を払うべきであろう。その点31位から、主要語彙とした度数5までの語の様相が注意せられる。

第七表

使用語彙表(2)

順位	使用度数	動	詞
31~40	24~21	書く <sup>い</sup> 24, 行く <sup>う</sup> 23, 召す22, 着る22, 入る<下二段>21, 会(合)ふ21, 立つ<四段>21, 得21, 往ぬ21, 参らす21	
41~56	20~16	泣(鳴)く <sup>う</sup> 20, おはす20, 寄る19, 住む19, 付く<自>19, 置く19, やる19, 奉る18, 頼む<四>18, す<自>18, 思す17, 語る17, 過ぐ17, 死ぬ17, 遣はす16, 行なふ16,	
57~76	15~11	賜はる15, 始む15, 持つ14, 拝む14, 思ひかく14, 尋ぬ14, 喜ぶ13, 具す<自>13, 思し召す12, 乗る12, 呼ぶ12, 急ぐ11, 臥す11, 待つ11, 宣ふ11, 汲む11, 給ふ11, 懸く11, 助く11, 持てく11	
77~82	10	通ふ, 使ふ, 付く<下二>, 罷り出づ, 経 <sup>ふ</sup> , 御覧す	
83~89	9	従ふ<四>, 止む <sup>や</sup> , 下る <sup>くだ</sup> , とまる, 開く<自>, 搦む, 覚む	
90~102	8	歎く, 引く, 返す, 成す, 渡す, 増る, 起く, 開く<他>, 見す, 立つ<下二>, 眺む, 忘る, 侍り	
103~110	7	抜く, 患ふ, 忍ぶ, 集まる, 罷る, 哀れがる, 留む, 倒る	
111~132	6	歩く, 驚く, 乾く, 除く, 指す, 語らふ, 当る, 惜じむ, おこたる, 替る, 受け取る, 降る, 渡る, あさましがる, 下る <sup>お</sup> , 設く, 逃ぐ, おこす, 取り出づ, 遅る, 離る, 持たり	
133~160	5	し歩く, 騒ぐ, 揺ぐ, 下ろす, 俯し伏す, 打つ, 物食ふ, 惑ふ, 向かふ, 思ひ患ふ, 飛ぶ, 盗む, 磨る, 仕まつる <sup>つか</sup> , 返り参る, 尊がる, 似る, 生く, 打解く, 捨つ, 果つ, 替ふ, 捕ふ, 構ふ, 食ふ, 聞こゆ, 絶ゆ, 据う	

## 八、分類語彙表 一活用型・行による

- まず活用型、次いで活用の行により分類する。
- 同一活用行の語を、五十音順に配列する。ただし、複合語は下位構成の動詞そのものの位置に並べて示す。末に顕著な接尾語により構成された語を示す。
- 単位語はゴジックで示す。複合形または転成語のみあって、動詞そのものの例に欠ける場合、
- ▼ 目次のみにある語は〔 〕の中にゴジックで示す。
- 各語に用例数を付すが、用例数1は省略する。

### 1. 四段活用

**カ行** 飽く。開く2。歩く6，行なひ歩く，通ひ歩く，差し上り歩く，し歩く5，修行し歩く，尋ね歩く，撞き歩く，参り歩く4，見歩く，持て歩く。行く23，行く28，荒れ行く，狩り行く，飛び行く，成り行く，更け行く，持て行く，引き持て行く。抱く，抱く，かき抱く。〔傳く〕。〔動く〕。置く19，言ひ置く2，打ち置く，送り置く，語らひ置く，刈り置く，差し置く，溜め置く，契り置く，溜め置く，取り置く，投げ置く，見置く2。驚く6，打ち驚く，思ひ驚く。〔輝く〕，光り輝く。欠く。書く24。〔かしづく〕，持てかしづく。〔被く〕，打ち被く，引き被く。乾く6。聞く32，問ひ聞く2。装束く。咲く。敷く，打ち敷く。しぶく。好く。〔阻く〕。焚く。叩く，打ち叩く2。突く4，打ち突く，爪づく，膝まづく。付く(自)19，愛敬付く，有り付く2，語らひ付く，近付く2，取り付く，病ひ付く3，寄り付く3。付く(他)。築く。〔着く〕，行き着く，来着く，下り着く。続く2，打ち続く，飛び続く，持て続く。説く2，〔口説く〕。解く。泣(鳴)く20，打ち泣く2，臥し転び泣く。歎く8，思ひ歎く3，恋ひ歎く，佗び歎く。抜く7。退く2。除く6。吐く。佩く3。動く，打ち動く。引く8，たなびく2，みちびく4，弾く4。響く。吹く3，打ち吹く。蒔く3，巻く。みじろく。向く2。〔分く〕，取り分く2。湧く，ふり湧く。わななく。〔一めく〕，うめく，きら(ろ)めく，そよめく，ぶめく3，〔くるめく〕，目くるめく。

**ガ行** 〔仰ぐ〕。急ぐ11。嗅ぐ。騒ぐ5，怖ぢ騒ぐ，立ち騒ぐ，泣き騒ぐ，走り騒ぐ，見騒ぐ，喜び騒ぐ。〔次ぐ〕，聞き次ぐ3，取り次ぐ3。繋ぐ2。脱ぐ4。剥ぐ。ふたぐ。揺ぐ5，打ち揺ぐ。

**サ行** 〔明かす〕，見明かす，燃え明かす，居明かす。致す。出す，打ち出す，選り出す，追ひ出す，かき出す，差し出す3，し出す，尋ね出す，取り出す2，〔出す〕。〔移す〕，造り移す。起こす2。〔押す〕。落とす2。思す17。下ろす5，取り下ろす，見下ろす3。隠す4，引き隠す2。貸す。〔交はす〕，挑み交はす2。返す8，思ひ返す，吹き返す。通はす。〔下す〕。暮(眩)らす2，泣き暮す。殺す。鎖す2。指す6，心ざす。過す4，上げ過す，過す3。〔すます〕，思ひすます。遣はす16，仰せ遣はす，仰せられ遣はす。尽す2，言ひ尽す。照らす3。飛ばす。通す。灯す3。〔流す〕。なす。成す8，見なす2，もてなす2。直す。濡らす2。残す，食ひ残す。〔弛す〕，取り弛す，引き弛す。臥す11，打ち臥す，俯し臥す5，うつ臥す2，聞き臥す，

泣き臥す、病み臥す、寄り臥す4。干す。[惚らす]、言ひ惚らす。申す87、愁へ申す、呻ち申す、口説き申す、断り申す、責め申す、尋ね申す、逃れ申す2。増す3。[ます]、おはします32、います2。[廻はす]、告げ廻す2、見廻はす。[廻らす]、引き廻らす。召す22、思し召す12、聞こし召す。許す4。渡す8。わななかす。犯す2。[一めかす]、ほのめかす。

【タ行】 打つ5。[呻つ]。[消つ]、打ち消つ、かい消つ。壊つ2。立つ21、出で立つ2、落ち立つ、守り立つ、見立つ。絶つ。保つ2。放つ2。待つ11。持つ14、埋み持つ。[一ごつ]、<sup>ひとり</sup>独ごつ2。[一だつ]、人だつ。

【ハ行】 [扱ふ]、し扱ふ。合(会)ふ21、打ち合ふ、語らひ合ふ。悲しみ合ふ、来会ふ2、騒ぎ合ふ、取り合ふ、泣き合ふ2、ののしり合ふ、参り会ふ、見合ふ、<sup>め</sup>賞で合ふ、詠み合ふ、喜び合ふ。洗ふ、搔き洗ふ。厭ふ。言ふ270、責め言ふ、物言ふ3。失なふ3、切り失なふ、し失なふ。疑ふ2。移ろふ。行なふ16。訪なふ。追ふ4。覆ふ、造り覆ふ。思ふ160、<sup>い</sup>焦り揉み思ふ。語らふ6。叶ふ4。飼ふ3。買ふ3。[交ふ]、筋交ふ。通ふ10、吹き通ふ。食ふ41、打ち食ふ、切り食ふ。掬ひ食ふ2、巢食ふ、煮食ふ2、物食ふ5、割り食ふ。食らふ2。乞ふ4。誘ふ。さはふ。候らふ。[さらほふ]、瘦せさらほふ。従ふ9。慕ふ。<sup>しつら</sup>設ふ4。掬ふ。救ふ。吸ふ。損なふ。詠み損なふ。添ふ2。違ふ2。賜ふ3。誓ふ。違ふ。使ふ10、取り使ふ2。繕ふ2。集ふ、持て集ふ、参り集ふ。問ふ29、訪ふ。訪らふ2。習ふ4。担ふ2。匂ふ2。盗まふ。縫ふ3。嫌ふ。[拭ふ]、かい拭ふ。宣ふ11。計らふ。払ふ2、打ち払ふ2。拾ふ。震ふ2、打ち震ふ。ふるまふ。紛ふ。惑ふ5、失せ惑ふ、騒ぎ惑ふ、泣き惑ふ2、願ひ惑ふ。[迷ふ]、恋ひ迷ふ。廻ふ。向かふ5、馳せ向かふ。養なふ2。結ふ2。患ふ7、思ひ患ふ2。笑ふ5。言ひ笑ふ。

【バ行】 遊ぶ3。忍ぶ7。賜ふ11。尊ぶ。飛ぶ5。[並ぶ]、着き並ぶ。運ぶ2。[転ぶ]。呼ぶ12。喜ぶ13。

【マ行】 あさむ、見あさむ。哀れむ。[間む]。編む。あやしむ3。歩む。青む。[挑む]。忌む2。埋む。産む3。[悲しむ]、悔い悲しむ。泣き悲しむ2。軽む。刻む。くくむ2。窪む。汲む11。[組む]。好む。[籠む]、参り込む。染む2。沈む。[痊む]、<sup>すく</sup>冷え痊む。[すさむ]。進む。澄む。住む19。畳む。打ち畳む。頼む18。[憐む]。擲む。包む3、思し包む。積む。摘む、引き抓む。飛む。なづむ。[並む]、立ち並む、居並む2。悪む2。盗む2。ぬるむ。望む2。飲む4。挟む3。平む。踏む。まどろむ、打ちまどろむ。[揉む]、<sup>い</sup>焦り揉む。休む。止む9、さは止む。[病む]。歪む2。詠(読)む60。[わぐむ]、かいわぐむ。[笑む]、ほほ笑む。拜む14、仰ぎ拜む、打ち拜む、臥し拜む。惜しむ6。[一ばむ]、気色ばむ。

【ラ行】 [上がる]、起き上がる3、差し上がる、揺ぎ上がる。当る6。集まる7、<sup>ま</sup>参り集まる2。蔑る。[あふる]、さりあふる。余る3。至る3。祈る4。要る。入る31、落ち入る4、思ひ入る、御殿籠り入る、消え入る、絶え入る2、寝入る2、念じ入る2、引き入る、まどろみ入る、<sup>い</sup>逝き入る。売る2。選る。送る。おこたる6。起こる2。劣る3。[終る]、計らひ終る。[おほほる]、さしおほほる。[屈まる]。懸かる4、押しかかる、落ちかかる2、走りかかる。限る。重なる。畏まる2。語る17。替る6。返(帰)る32、見返る2、走り帰る3、噎せ返る2、持て

返る。借る2。〔狩る〕,〔刈る〕。切る3,引き切る。括る,引き括る。<sup>くだ</sup>下る9。配る。曇る,成り曇る。〔断る〕。籠る4,御殿籠る2。樵る。離る,遠ざかる。〔探る〕,かい探る。障る。去る3,行き去る,立ち去る2。〔繁る〕,生ひ繁る。知る52,思ひ知る,見知る2。磨る5。たぎる。助かる。奉る18,打ち奉る。賜はる15,承はる3,返し賜はる。溜る2。契る4,言ひ契る。散る4,行き散る,打ち散る,走り散る。造る37。伝はる。積る3。釣る2,打ち釣る。照る。とまる9。取る37,受け取る6,打ち取る,押し取る,買ひ取る,切り取る,習ひ取る,運び取る,彫り取る。〔訛る〕,よこなまる。鳴る。成る116,罷り成る2。握る2。塗る2。眠る。残る3,<sup>あは</sup>荒れ残る,壊れ残る。ののしる,言ひののしる,讃めののしる,見ののしる,拝みののしる。<sup>のほ</sup>上る34,掻き上る2,返り上る,立ち上る2,飛び上る。罷り上る。乗る12。<sup>はか</sup>謀る3,打ち謀る,推し測る,たばかる。走る,<sup>お</sup>下り走る,立ち走る,逃げ走る。〔張る〕,引き張る。〔光る〕,玉光る。浸る。臥せる2。太る。降る6。隔たる。<sup>はぶ</sup>屠る。掘る3,かい掘る。罷る7。まさぐる,言ひまさぐる。増る8,荒れ増る,零れ増る,立ち増る,成り増る。混じる。杞る2,仕まつる5,<sup>つかう</sup>仕まつる4。参る100,返り参る5,持て参る3。向かはる。<sup>むつか</sup>憤る。<sup>めぐ</sup>廻る,し廻る。盛る。〔漏る〕<sup>やぶ</sup>宿る。破る。遣る19,言ひ遣る,思ひやる,汲みやる,塗りやる,引きやる,見やる2,行きやる。譲る2。寄る19,依る3,歩み寄る3,言ひ寄る,思ひ寄る,参り寄る。忘る2。渡る6,きらめき渡る,冴え渡る,歎き渡る,見え渡る2。〔割る〕。折る3,打ち折る。〔一がる〕,あさましがる6,哀れがる7,あやしがる4,忝ながる,口惜しがる,暗がる,苦しがる,希有がる,心憂る2,心悪<sup>にく</sup>がる,尊がる5,泣き哀れがる,欲しがる。〔一ごる〕,広ごる。

## 2. 上一段活用

ア行 〔沃る〕。

カ行 着る22。

ナ行 煮る。似る5。

ハ行 〔乾る〕,干し乾る。

マ行 見る150,打ち見る,心みる,振りさけ見る。

ワ行 居る36,落ち居る3,<sup>お</sup>下り居る,<sup>かが</sup>屈まり居る3,隠れ居る,替はり居る,食ひ居る,し居る,立ち居る,疲り居る,眺め居る,眠り居る,待ち居る,守り居る,見居る2,持て居る,拝み居る。率る3。

## 3. 上二段活用

カ行 生く5。起く8。尽く2。

ガ行 過ぐ17。

タ行 落つ4,躍り落つ。朽つ。〔満つ〕,飽き満つ,成り満つ。

ダ行 〔怖づ〕。

ハ行 生ふ4。恋ふ。

バ行 佗ぶ、思ひ佗ぶ<sup>2</sup>、し佗ぶ、尋ね佗ぶ。〔一ぶ〕、否ぶ、大人ぶ。

マ行 〔浴む〕、湯浴む。恨む<sup>2</sup>。

ヤ行 老ゆ<sup>4</sup>、年老ゆ、罷り老ゆ。〔悔ゆ〕。〔報ゆ〕。

ラ行 下る<sup>6</sup>。疲る。

4. 下一段活用 <用例なし>

5. 下二段活用

ア行 得<sup>21</sup>、心得<sup>3</sup>、読み得<sup>2</sup>。

カ行 開く(自)<sup>9</sup>、開く(他)<sup>8</sup>、押し開く、引き開く<sup>3</sup>。預く<sup>2</sup>。生く。受く。懸く<sup>11</sup>、打ち懸く<sup>3</sup>、思ひ懸く<sup>14</sup>、引き懸く<sup>2</sup>、振り懸く、見懸く、詠み懸く。傾く。被く<sup>2</sup>。助く<sup>11</sup>。付く<sup>10</sup>、言ひ付く<sup>2</sup>、打ち付く、書き付く<sup>3</sup>、事付く、名付く、吹き付く、待ち付く、見付く<sup>3</sup>、結ひ付く。〔続く〕、言ひ続く、産み続く、思ひ続く、書き続く。〔解く〕、打ち解く<sup>5</sup>。更く<sup>2</sup>。設く<sup>6</sup>、切り設く。負く。向く。焼く<sup>3</sup>。

ガ行 上ぐ<sup>3</sup>、抱き上ぐ、吹き上ぐ、見上ぐ<sup>4</sup>、読み上ぐ<sup>4</sup>、かかぐ、ささぐ、もたぐ。告ぐ<sup>3</sup>。〔投ぐ〕、身投ぐ<sup>2</sup>。逃ぐ<sup>6</sup>。拡ぐ<sup>3</sup>、引き拡ぐ。

サ行 合はす<sup>3</sup>、し合はす、調め合はす、見合はす。失す<sup>32</sup>、朽ち失す、罷り失す。おこす<sup>6</sup>。仰す<sup>3</sup>、負す。着す<sup>2</sup>。知らす<sup>3</sup>。給はす<sup>3</sup>。飛ばす。取らす<sup>37</sup>、返し取らす<sup>3</sup>。宣はす<sup>2</sup>。上す。〔馳す〕。臥す、切り臥す<sup>2</sup>、添へ臥す。任す<sup>2</sup>。参らす<sup>21</sup>。見す<sup>8</sup>。〔むす〕。寄す<sup>3</sup>、呼び寄す<sup>2</sup>。〔一さす〕、聞こえさす。

ザ行 混ず。

タ行 当つ<sup>4</sup>。〔棄つ〕、沃棄つ。掙つ。捨つ<sup>5</sup>、脱ぎ捨つ、払ひ捨つ、引き捨つ。立つ<sup>8</sup>、出し立つ、起し立つ、し立つ、出し立つ、突き立つ<sup>2</sup>、造り立つ、爪立つ、呼び立つ。〔閉つ〕。果つ<sup>5</sup>、厭ひ果つ、押し果つ、消え果つ、拵め果つ、死に果つ、し果つ、絶え入り果つ、取り果つ、引き果つ、参り果つ、遣り果つ、忘れ果つ。

ダ行 出づ<sup>31</sup>、憧れ出づ、行なひ出づ<sup>2</sup>、思し出づ、思し召し出づ、思ひ出づ<sup>2</sup>、指し出づ<sup>4</sup>、取り出づ<sup>6</sup>、匂ひ出づ、引き出づ<sup>2</sup>、惑ひ出づ、罷り出づ<sup>10</sup>、漏り出づ、詠み出づ、湧き出づ、出。〔奏づ〕、舞ひ奏づ。詣づ<sup>2</sup>。愛づ。茹づ。

ナ行 〔難ぬ〕、堪へかぬ。尋ぬ<sup>14</sup>。寝ぬ<sup>4</sup>。

ハ行 〔与ふ〕。〔敢ふ〕、し敢ふ、忍び敢ふ、閉て敢ふ。答ふ<sup>4</sup>。〔憂ふ〕。替ふ<sup>5</sup>、入れ替ふ、置き替ふ。構ふ<sup>5</sup>。加ふ。誘ふ。答ふ<sup>2</sup>。従ふ。添ふ。貯はふ。湛ふ。堪ふ。譬ふ。〔仕ふ〕。〔伝ふ〕、言ひ伝ふ、取り伝ふ<sup>2</sup>、申し伝ふ。整ふ。捕ふ<sup>5</sup>。経<sup>10</sup>。踏まふ。迎ふ。教ふ<sup>2</sup>、言ひ教ふ。

バ行 〔較ぶ〕、思ひ較ぶ。食ぶ<sup>5</sup>。〔並ぶ〕、取り並ぶ。延ぶ<sup>4</sup>、指し延ぶ。求ぶ。

マ行 崇む<sup>2</sup>。〔集む〕、取り集む<sup>3</sup>。戒しむ<sup>4</sup>。〔固む〕、造り固む。擲む<sup>9</sup>。込(籠)む、立て込む、降り込む、蒔き込む。定む。覚む<sup>9</sup>。拵む<sup>2</sup>、入れ拵む。調む<sup>3</sup>。〔責む〕、言

ひ責む。責む3。〔初む〕、来初む。留む7、塞き留む。眺む8。慰む。始む15。会ひ始む。讀む2。求む4。休む。止む。収む3。〔一む〕、苦しむ。

ヤ行 思ゆ35、思ほゆ。聞ゆ5。消ゆ4。越ゆ2。栄ゆ2。冴ゆ。絶ゆ5、かき絶ゆ。煮ゆ。冷ゆ。見ゆ54。

ラ行 懂る。荒る<sup>あは</sup>3。現はる4。〔荒る〕。入る21、打ち入る2、落とし入る3、聞き入る、指し入る4、流し入る、引き入る、掘り入る、見入る2、召し入る、呼び入る。遅る6。訪る、打ち訪る。隠る4、立ち隠る。呉る3。暮る3、明け暮る、眩る。〔焦る〕、思ひ焦る、泣き焦る。壊る3。〔零る〕。〔痴る〕。すぎる。優る4。倒る7。流る3。慣る、目慣る。濡る2。離る6、人離る。晴る2。触る2。乱る2。産る<sup>むま</sup>3。〔破る〕、朽ち破る。破る<sup>や</sup>2。別る2。忘る8、思し忘る、思ひ忘る、見忘る。折る。〔一らる〕、仰せらる30。

ワ行 植う4。据う5、隠し据う、し据う、立て据う、造り据う2。

#### 5. カ行変格活用

来<sup>く</sup>52、現はれ出でく、出でく28、入りく3、下り<sup>お</sup>りく、帰りく2、取り持てく、走りく、詣でく3、廻り<sup>めぐ</sup>りく、持てく11、寄りく。

#### 6. サ行変格活用

和語 す<自>18、す<他>220、音す4、狩りす、消えす、浄めす、尽きす2、物語りす3、物す2。特殊 おはす20、尋ねおはす。

字音語 愛す、安置す、要す、学問す2、感ず2、饗応す、具す(自)2、具す(他)13、打ち具す、引き具す、供養す、興ず、懸想す、結縁す2、希望す、験ず2、現ず、困<sup>こま</sup>ず2、植ふ困ず、歩み困ず2、護身す、御覧す10、精進す、沙汰す2、見沙汰す、懺悔す、請ず2、信ず、受戒す4、修行す、出家す2、誦ず2、証す、損ず、持す、追従す、調ず、土葬す、念ず4、祈ひ念ず、判ず、変ず2、益す、打ち接ず、往生す2、論ず2。

#### 7. ナ行変格活用

往ぬ21、失せもて往ぬ。死ぬ17。

#### 8. ラ行変格活用

有り250、おはしあり、かかり、持たり6。侍り8。居り2。

### 付. 補助動詞

補助動詞の認定の範囲には諸説があり、更にその一部を助動詞と呼ぶ説もある。本論では元来明らかに動詞であったものが、辞として用いられる場合を補助動詞と称し、範囲を限定して、次の用法のみを補助動詞として扱う。

1. 指定。形容詞・形容動詞・助動詞「ず」「べし」「なり」の連用形に接続するもの。形容動詞・助動詞「なり」の連用形として「に」の他に「にて」も認め、「似るべくもあらず」の如く助詞の入った形も含める。しかし、「たのしくてぞありける」の如き「て」の介在するもの、「しうこそあらめ」の如き指定表現、「ただあらん女」など副詞接続、などは補助動詞としない。
2. 敬讓。動詞・助動詞「す」「さす」「る」「らる」の連用形に接続するもの。

第八表

補助動詞延べ語数表

語	活用型	卷			活 用 形					
		上	下	全	未	用	止	体	已	命
あ り	ラ 変	28	33	61	28	25	0	5	3	0
い ま す	サ 四	1	1	2	0	2	0	0	0	0
おはします	サ 四	11	10	21	2	7	3	5	2	2
お は す	特 殊	7	7	14	0	8	2	2	2	0
きこえさす	サ下二	2	0	2	0	1	0	1	0	0
き こ ゆ	ヤ下二	0	1	1	1	0	0	0	0	0
さぶらふ	ハ 四	16	42	58	15	17	9	14	3	0
たてまつる	ラ 四	15	55	70	16	30	7	13	4	0
た ぶ	バ 四	1	2	3	0	2	1	0	0	0
た ま ふ	ハ 四	145	154	299	25	138	27	36	48	26
た ま ふ	ハ下二	2	1	3	0	2	0	0	1	0
は べ り	ラ 変	8	8	16	5	4	1	4	2	0
ま う す	サ 四	2	2	4	1	3	0	0	0	0
ま ゐ ら す	サ下二	5	24	29	4	20	3	2	0	0
計		243	340	583	97	259	53	81	63	28

[付記] 本稿は広島大学大学院での藤原与一先生の語彙論演習における成果を骨子としている。御指導いただいた土井忠生・藤原与一两先生に感謝しあげるとともに、爾来数年を経るにも拘らず、進歩することのない自らを恥ずるのみである。(昭和42年2月10日)

(本学助教授)